

FD シンポジウムに参加して

社会科教育講座・矢澤 知行

1) はじめに

今回の FD シンポジウムでは、教職課程における最終授業科目である「教職実践演習」について 3 件の話題提供があった。シンポジウムに参加して、「教職実践演習」についての理解が深まるとともに、本学部の教員養成カリキュラムが抱えている課題や自ら実践している授業との接合について新たな発見が多々あった。本稿では、シンポジウムの内容のうち、とくに重要と考えたことについて、以下、3 つの点に着目しながら論じてみたい。

2) DP との対応関係について

本学部では、教員養成課程の DP として 5 つの項目を掲げている。「教職実践演習」が「学びの軌跡 (の集大成)」を確認する位置づけにある以上、同科目の評価を DP の各項目に照らして実施することは必須の条件といえよう。しかし、山崎氏も指摘していたように、「学びの軌跡 (の集大成)」の確認を一科目だけで行うことは困難であり、リフレクション・デイなどを活用して、各々の学生が総合的な自己到達評価を行えるような支援体制の構築が重要である。リフレクション・デイの効果をいっそう上げるためには、学生たちが既存の履修カルテを活用しながら一連の自己到達評価を実質的に機能させることが欠かせない。例えば、現行の方法のもとで学生にとって負担となっている形式的な作業をある程度減らし、履修カルテを、より記入しやすく、また、後日自ら参照しやすく、完成させることに充実感を覚えるようなものに改良していくことが望まれる。

3) オリジナル・カリキュラム・マップについて

今回のシンポジウムにおいて、とくに印象的だったのは、山崎報告にあった「学生自身

によるカリキュラム・マップの作成」である。大学教員側が用意した最大公約数的なカリキュラム・マップではなく、学ぶ主体としての個々の学生が、自ら課題を発見し、解決へと結びつける姿勢を尊重するというオリジナル・カリキュラム・マップの作成は、他大学の状況と比較してもきわめて有意義なものと評価できる。そこで重要となるのが、前節で述べたように、「教職実践演習」以外の科目を含めた支援体制の構築である。とりわけ、附属校園における教育実習を経験した後の、3 年生後学期～4 年生後学期に担当されている科目において、個々の学生のそうしたニーズに応える授業内容を盛り込んでいくことが肝要となる。

また、教員になるうえでの課題は、個々の学生によって少しずつ異なることもありうる。そうした振幅も許容しつつ、また、場合によっては、オリジナル・カリキュラム・マップを軌道修正したり、進路変更したりする可能性も考慮しながら、個々の学生の主体性を重んじる支援体制を作っていく必要があるのではないだろうか。

4) 4 年生後学期担当科目 (「外国史 6」) の授業改善の方策・計画

報告者は、現在、「教職実践演習」と同様、4 年生後学期の担当科目 (「外国史 6」) を担当している。上述の内容に関わって、同科目の授業改善の方策・計画を具体的に考えてみたい。

まず、同科目は、「イスラームとは何か?」という題目を掲げる専門教科科目である。到達目標としては、“イスラームの特質を宗教・歴史などの側面から理解すること”を目的としつつ、“社会と個人、「普遍」と「個別」の関わり等、人文社会科学上の基本問題と密接につながっており、教員養成課程のカリキュラムにおいて欠かせない視点を提供するものである”という点を掲げている。同科目に対

応する主要なDPは、DP2（現代的・社会的課題に対する関心と問題解決力）である。

今まで報告者は、DP2にのみ注意を払ってこの科目を担当してきたが、上述の課題に照らして授業改善の方策・計画を再考するとすれば、DP2に加えてDP4（実践と理論の往還による学びと省察力）へと接続できるかどうかという点が、新たな課題として浮かび上がる。つまり、受講生がこれまで学んできた一連の教育実習科目群を中心とする実践的な授業のうえに、この専門教育科目をどのように接続させるかという課題ともいえる。

そこで、2015年度後学期の「外国史6」の実際の講義では、「イスラームとは何か？」という題目を、「日本の学校教育」という一見かけ離れたテーマと結びつけるために、工夫を随所に凝らした。例えば、イスラーム世界における「礼拝」を日本の学校教育における時間感覚と比較して論じたり、現代の西アジア情勢下における子どもたちの現状を取り上げて、日本の教育の現状との共通点・相違点を考察したりしたのである。

そうした内容を盛り込んだ意図としては、これまで受講生たちが馴染んできた教育実践に対する固定観念を自ら相対化し、「実践と理論の往還による学びと省察力」を、世界の現状を視野に収めた、より幅の広いものへと展開させることが挙げられる。

## 5) おわりに

個々のDP1～4は、それぞれ独立したものというよりは、学生たちがそれらを自己の中で有機的に結びつけることによって、ようやく価値を持つものとも考えられる。大学の講義担当者も、限定された唯一のDPだけでなく、複数のDPを念頭に置きながら授業を工夫する可能性がまだ残されているように思う。

以上に述べた点に留意しながら、今後もFD活動に積極的に取り組んでいきたい。